義への抵抗と忍耐を貫き、彼らがいかに明晰な知性と批判的精神を持ちながらシオニストに対峙してきたのが明快に刻印されていることである。本稿で名前を挙げた、著者の曾祖父の叔父であるユースフ・ディヤー、著者の父親のイスマールのみならず、アル＝ハーリディー家の一族が残した一次資料や彼らの語りを丹念に分析して、本書は構成される。それを可能にしたのは、アル＝ハーリディー家がエルサレム旧市街に私設図書館を持ち、1200冊以上の手書き写本（最も古い写本は11世紀にまで遡る）、19世紀に刊行された書籍やアル＝ハーリディー家の文書が2000点ほど保管されるためでもある。本書は、一族が世代を超え、シオニスト運動に対して第一線で抵抗してきた体験を受け継ぐラシード・ハーリディーにしか執筆することができない成果である。パレスチナ人知識人当事者たちによる100年間にわたるパレスチナ植民地化の通史であると高く評価できる。

惜しまれる点があるとすれば、パレスチナをめぐる国際政治に焦点を当てたテーマであるがゆえに、シオニスト運動による民族浄化の直接的な犠牲者にされ、国際社会から顧みられずに命を落としていった無数のパレスチナ難民の存在への着目が少なかったことに物足りなさを感じる。国際世論に良い影響を与えた第一次インテファダと比較して、近隣アラブ諸国を拠点としたPLOの武装闘争は、「世界地図にパレスチナを取り戻しはしたものの、全体的に見て効果のなかった」（本書214頁）ものと述べる点は、PLO幹部に対する批判としても受け止められる。その一方で、PLOが主導した解放運動の主体を構成したのは、難民キャンプに暮らすパレスチナ難民が圧倒的多数であった。離散の地でパレスチナへの帰還を願って銃を取り戦った死者、心身に傷を負った生存者の存在がいるということ、そうした無数の死者の上にパレスチナ抵抗運動が連綿と続いてきたことを忘れてはならないだろう。とはいえ、パレスチナ／イスラエル紛争の根源を知るうえで、本書は必読書であり、日本語の全訳が刊行された価値は計り知れない。2023年10月7日から始まったイスラエルによるガザ地区への戦争によって、ガザのパレスチナ人が少なくとも4万3,391人が殺害され、レバノンで3,013人が殺害された前代未聞の人道危機が続く（2024年11月6日現在）。本書は、パレスチナ人が強大な権力に翻弄され苦しんできた100年間の歴史を、そこに居合わせた著者の家族史・個人史に基づき論じたパレスチナ／イスラエル理解の決定版である。

（児玉 恵美 東京外国語大学大学院総合国際学研究科）

Abdullah Hamidaddin (ed.). 2022. *The Huthi Movement in Yemen: Ideology, Ambition, and Security in the Arab Gulf*. New York: I.B. Tauris. xiv+291 pp.

今日、フーシー派(al-Hūthīyūn)¹⁾はイエメン内政のみならず、2023年10月7日から続くガザ紛争をめぐる動きに見られるように、中東政治あるいは国際政治における最重要な非国家主体の一つとなりつつある。そのなかで、本書『イエメンにおけるフーシー派——思想・野望・アラブ湾岸における安全保障』は、その実像へのアプローチを試みた一冊として高く評価できる。

本書の目的は、フーシー派を包括的・批判的に分析し、同派のイエメンひいてはアラブ湾岸地域の安全保障に対する影響を示すことである(p.3)。編者は、多くの学術論文やイエメンに関する本では、その歴史やフーシー派の台頭をもたらした社会経済的・政治的要因など様々な側面が議論されてきたと述べる。しかし、宗教や文化、政治などに関する多くの重要な問題が未だ議論されていないことを編者は問題としており、本書ではその解決が目指される。そのために、本書では通時的視点ではなく共時的視点から問題が議論される。

本書の編者 Abdullah Hamidaddin は、ロンドン大学キングス・カレッジで文化人類学の博士号を取得した研究者である。2020年9月にファイサル国王イスラーム研究センターへ入り、科学担当事務次長兼首席研究

1) アンサールラー(Ansār Allāh, 神の支援者)とも呼ばれる。もっとも、「フーシー派」とは、後の同派の前身となる「信仰する若者たち(al-Shabāb al-Mu'min)」の指導部分裂において、フサインを支持する者に対して用いられた蔑称であった。彼らは長く自らに対する呼称を持っていなかったが、2011年によく自らを「アンサールラー」と称した。

員を務めている。主な研究関心は、特にサウディアラビアに注目したムスリム共同体の宗教的変容、アラブ湾岸地域の地政学、イエメンの政治的・社会的変容とされる。本書以外にも『ツイートされた異端——変容の中にあるサウディ・イスラーム (*Tweeted Heresies: Saudi Islam in Transformation*)』をオックスフォード大学出版より2019年に刊行し、その他にも現代イエメン政治に関する多くの研究業績を有する。

本書は、以下の通り、全4部、14章から構成される論集である。

- 第1部 フーシー派の思想と信仰体系
- 第1章 フーシー派の宗教・政治思想とイエメンのザイド派との関係 (Bernard Haykel)
- 第2章 フーシー派の創設者から現指導者に至るまでの主要な政治テーマの変容 (Mohammed Almahfali)
- 第3章 「ソフトな戦争」と過去——フーシー派による正統性の源泉としての歴史ナラティブの利用 (Alexander Weissenburger)
- 第2部 イエメン社会の再構成
- 第4章 部族と支配者3.0——フーシー派イエメンの支配的立場と「サバルタン」 (Marieke Brandt)
- 第5章 フーシー派体制下の女性——ジェンダー・ナショナリズム・イスラーム (Ewa K. Strzelecka)
- 第6章 フーシー派の教育への影響——介入と政策に関する一研究 (Shaker Lashuel)
- 第7章 プロパガンダ・創造力・外交——フーシー派のメディアと公共メッセージへの適応アプローチ (Hannah Porter)
- 第8章 フーシー派のザームル——民俗文学かプロパガンダか? (Emily J. Sumner)
- 第3部 国家の再設計
- 第9章 イエメンにおける「国家」と強制力——フーシー派と部族・宗派分野 (Anthony Chimento)
- 第10章 フーシー派の国家観——非公式イマームを持つフーシー派共和制 (Charles Schmitz)
- 第11章 国家へ——アンサルルラーが地方レベルで正式な制度を引き継ぎ、適応させた方法 (Joshua Rogers)
- 第4部 地域への影響
- 第12章 ハイブリッド戦争——サウディ主導連合軍によるイエメン介入 (2015–202?) からの教訓 (James Spencer)
- 第13章 イエメン・サウディ国境——フーシー派とハイブリッド・セキュリティ・ガバナンスの発展 (Eleonora Ardemagni)
- 第14章 プロキシを超えて——外交政策を持つ非国家主体としてのフーシー派? (Maria-Louise Clausen)

まず、第1部「フーシー派の思想と信仰体系」では、フーシー派の思想と信仰体系が三つの相互に関係する問題から精査される。

第1章では、フーシー派の前最高指導者で、2004年に死去したフサインの教えを収録した書物である『マラーズィム (*Malāzīm*)』の分析から、ザイド派の思想潮流、また現代イエメン及びイスラーム・アラブ世界の政治・文化史へのその位置づけが試みられている。フサインの世界観や教えとして著者は、①クルアーンの導きと、②預言者ムハンマド一族の指導的役割を主たる特徴として挙げる。『マラーズィム』におけるフサインの言説ではクルアーンの章句が中心に置かれる。そして、フサインが「導きの指導者 (*‘alām al-hudā*)」と呼ぶ者の指導に従うことで共同体はクルアーンの導きを理解して行動し、アッラーが人類に定めた秩序を確立できると主張される。しかし、フサインの思想による伝統的なザイド派の教えの否定と『マラーズィム』への置換は、伝統的なザイド派の間に否定的な反応を惹起したとされる。フサインの教えはイスラームの学問的伝統とも根本的に決別しており、著者はここに他のイスラーム主義思想との共通性を見出す。

第2章では、フサインの『マラーズィム』と現指導者アブドゥルマリク（‘Abd al-Malik al-Hūthī）の政治演説を取り上げ、それぞれにおける主要な政治テーマの変容が分析されている。その要諦は、第一に、宗教に関しては、他宗教に対し敵意を示したフサインと異なり、アブドゥルマリクはやや融和的な姿勢を採っているという。そのため、総じてフシー派は現実的な政治運動への変容を試みていると著者は捉える。第二に、アイデンティティについては、「人々」の概念の用法や理解に違いが見られると指摘される。すなわち、フサインは全てのムスリムを言説の受け手の対象と考えていたのに対し、アブドゥルマリクは全てのムスリムとイエメン人との間で均衡を取ろうとしていた。このことから、言説方針の変化は越境的なものから国内的なものに移行してきたと述べられる。第三に、敵に関しては、米国とイスラエルが主たる敵であるとの共通した意見に加え、アブドゥルマリクは「外敵」の代理人として働く「ローカルな敵」としてサウディアラビアやその同盟国を加えた。第四に、イランとの関係について、フサインはイラン・イスラーム共和制に共鳴した。一方、アブドゥルマリクの言説ではイランやホメイニーへの称賛がやや抑制されていると指摘される。

第3章では、フシー派による「ソフトな戦争（soft war）」の武器としての歴史的なナラティブの使用が分析されている。ここでは異なる時間枠から三つのナラティブが取り上げられている。第一は、預言者一族の家系をイエメンの系譜遺産に結びつける試みである。預言者一族が歴史的に社会に根付いていないイエメンで、祖先が預言者ムハンマドにまで遡ると言われるフシー派は、書籍の出版などにより同派をイエメン社会の不可分の一部であると唱えた。第二は、ザイド派イマームの概念の使用である。アブドゥルマリクは今日のイエメンの社会経済・政治状況との類似性を強調するために、初期ザイド派イマームの闘争をナラティブに使用しているが、それはザイド派あるいはフシー派の正統性の担保につながっているとされる。第三は、北イエメンの巡礼者一行がサウディアラビアの部隊により攻撃されたワーディー・タヌーマの虐殺（Majzara al-Tanūma, 1923年）である。この虐殺はフシー派の思想的主張を補完しており、同派はイエメンの歴史遺産への依存により自らの正統性の担保に努めてきた。これらのナラティブにより、フシー派は自らをイエメン社会固有の正統な宗教的・政治的主体、また圧政と戦う国家の決意の不可避で明確な現れとして表現していると著者は結論付ける。

第2部「イエメン社会の再構成」では、フシー派によるイエメン社会の再構成とそのため的手段が明らかにされる。

第4章では、① 1962年以前のイマーム制、② 1962年革命以降の共和制、③ 2014年以降のフシー派支配の三つのタイムフレームに分け、同派によりもたらされた北イエメン山岳地帯の部族・支配者間の関係変化が、「説得（persuasion）」と「サバルタン（subaltern）」の概念から論じられている。①では、イマームが部族の統治に用いた三つの柱として、第一に、戦いに向けた離伏のための部族への呼びかけにおける宗教用語の使用、それに従わない者の不信仰者としての区別、第二に部族を支配下に置くためにシャイフの家族から人質を取ったこと、第三に部族問題への干渉が挙げられる。②では、共和制が部族の統治に用いた三つの柱として、第一にシャイフへの権限付与、第二に部族からの忠誠心を買う取り組みの著しい増加、第三に分割統治があったとされる。最後に③では、フシー派が用いた三つの柱として、第一にサイド²⁾のリーダーシップの再活性化、第二に宗教集会への呼びかけの再活性化、第三に部族問題への干渉が挙げられる。ここでは①と③が類似するが、フシー派はイマーム制再導入を追求せず、むしろ共和制国家に自らの統治を重ねようとしていることを著者は指摘する。またフシー派の預言者一族の優遇により、その他のカフターニー（Qaḥṭānī）³⁾が社会の「サバルタン」としての地位に置かれ、これが単なる学術的議論だけでなく、イエメン社会全体の将来的な構成をめぐる壮大な闘争の表現になっていると著者は強調する。

第5章では、イエメンのジェンダー動態や女性の役割・地位に対するフシー派の影響が論じられている。男性優位のイエメン政治において、サーレハ（‘Alī ‘Abd Allāh Ṣāliḥ）政権以後の政治秩序を決める国民対話会議でフシー派は女性の権利向上に積極的な姿勢を見せたとされる。フシー派政府への女性登用も見られたが、これが必ずしもジェンダー平等のための権限付与を意味せず、むしろ同派の特定の権力利益に関係していたと著者は指摘する。すなわち、ザイナビーヤート（Zaynabīyāt）のような女性組織による女性対象の諜報や、女性支配などにつながった。さらに、服装規定などでより厳格なジェンダー政策が施行され、

2) 預言者ムハンマドの直系子孫および一部の傍系親族に対する一般的呼称[森本 2002]。

3) 非サイドで、南アラブに起源を持つと主張するイエメン人。

フーシー派に忠実な女性たちは、ナショナリズムや反西洋精神を体現することとなった。結論として、著者は、フーシー派支配下の女性の役割は紛争や国家形成の文脈により形成され、変容していると述べる。

第6章では、指導者による演説と講義、2015年から施行されている教育政策、2015年以降に発行された教科書の分析から、フーシー派がその統治下の教育に与えた影響と、同派の思想的展開や大義・野心の促進における教育の使用度合が分析されている。著者は、フーシー派による教育の定義と目的が旧来のイエメン政府によるものと異なることを指摘している。すなわち、フーシー派の教育カリキュラムはクルアーンに基づいており、同派による教育は自らのアイデンティティの強調、哲学流布、戦闘員育成に使われていると述べられる。フーシー派にとって教育は重要であり、教育に関する同派の行動や意思決定は、自らの大義促進と理念への支持者の人心掌握が目的とされる。フーシー派による教育分野での行動は、自らの敵との戦いと、スンナ派優勢の社会で自らの大義を広めるための探求により定義されていると結論付けられる。

第7章では、フーシー派によるメディア戦略の発展とその有用性が議論されている。フーシー派の歴史とそのメディアは関係が深いと著者は指摘する。その上で、フーシー派がメディア制作の拡大を続け、また現在の紛争に適応しようと変容してきたことが示される。そして、多様なメディアへの投資が特定の聴衆に対する自らのナラティブ作りを可能にしたという。さらに、自らの正統性を主張する営為としてフーシー派は、国際承認政府の正統性を破壊する取り組みである「平行ヒエラルキー (parallel hierarchies)」を創り出している。その上で、著者は紛争それ自体が、フーシー派のメディア制作と政治宣伝製造の維持につながっていると指摘する。とはいえ、フーシー派による自らの修辞技法や公のイメージの今後の内戦や平時への適用手法については未だ不明であると述べられている。

第8章では、イエメン社会に歴史的に根付いてきた口承詩である「ザーミル (zāmil)」に着目し、フーシー派のザーミルと伝統的なそれとの間の相違が分析されている。ここでは、伝統的なザーミルとフーシー派のそれとが比較される。すなわち、両者間には共通点も見られるが、フーシー派のザーミルは方言などの側面で湾岸地域の口承詩であるシャイラ (shayla) に似ているほか、同派のザーミルの詩の長さや宗教言説の含有などから伝統的なものとの相違が指摘される。フーシー派は、イエメン北部へ支配を強めるなかで、自らのイデオロギーをザーミルの中へ取り入れていった。一方で、伝統的なザーミルに用いられる語彙や比喩も用いてきた。このことはフーシー派の正統性を再強化させ、同派のザーミルをイエメン的なものへと位置づけることにつながると結論付けられている。

第3部「国家の再設計」では、フーシー派による国家とその構造の変容手法が検討される。

第9章では、「アラブの春」以後、複数のアクターが権力や暴力を分有し始めたイエメンにおけるフーシー派支配地域の政軍関係の動向が、部族・宗派分野における概念的アプローチ (①部族主義と共同体主義、②家産的経済、③国外アクター) を用いて論究されている。①については、フーシー派は部族との関係を構築した一方で、部族の影響力を弱めようとしてきた。これにより、フーシー派は部族の服従や容易な徴兵を可能にしてきたが、部族の支持の確保や暴力の独占の可否は未だ不明であると著者は述べる。②については、フーシー派は部族長らへの金銭的報奨の分配などに取り組んできたとされる。これはサーレハ政権期にも見られたが、著者はフーシー派がその構造を再現していると見る。③については、外国勢力が国内勢力に直接的な影響を与えやすいイエメンで、イランは政治状況の違いなどからヒズブッラーのような組織を同国で構築しない方針をとってきたが、同国北部の強制力の性質を変え得るフーシー派との関係を徐々に構築するようになった。これら三つの概念的アプローチの適用は、フーシー派支配地域の政軍関係の役割と性質を決定する可能性を持っているとされる。

第10章では、共和制への理想とザイド派への信奉という異なる組み合わせに基づくフーシー派の国家観についての評価が試みられている。著者はフーシー派の思想が「政治的に革命的 (politically revolutionary)」であると指摘している。すなわち、フサインの思想は、宗教言説の上に成り立っており、ムスリムと異教徒の闘争を骨子として世界を捉えた。これを踏まえ、著者はフサインが伝統的な宗教思想に対して懐疑的であり、彼の思想が宗教伝統ではなく「政治的行動 (political action)」の復興に重きを置くとして評価する。その一方で、アブドゥルマリクはフーシー派を政治・軍事組織に改変し、サーレハ政権に対する反乱へと発展させた。著者は、フーシー派のクーデター以後の行動や政治計画である「国家ビジョン (National Vision)」の内容の分析から、同派には共和国の遺産を引き継ぐ意志がある一方、ザイド派の枠組みにも留まろうとする姿

勢があると指摘する。しかし、アブドゥルマリクはフーシー派の国家元首ではないため、国家機関の外側にある彼の権力が国家機関の全体を破壊する危険性があるとの指摘がなされている。

第11章では、地方政府と行政の行動の変化に注目しながら、紛争とフーシー派の政策が国家再編に与えた影響が調査される。ここでは、フーシー派による複数段階の地方機関の権力奪取、中央集権化、新たな徴税方法などに着目しこの問題が論じられる。フーシー派による地方レベルの統治奪取は、①2014年～17年の国民全体会議(al-Mu'tamar al-Sha'bi al-'Ām, General People's Congress, GPC)との協力関係、②2018年～19年の同派の掌握、③2019年以降のローカル化(localization)と形式化(formalization)の三つの段階に分けられるとされる。フーシー派は、権力基盤のない地方の機関での存在容認を目指しGPCに依存していたが、次第に地方政府の重要な役職の占有により同派が支配を確立する様子が描かれている。また、税の徴収が地方レベルで行われ、同時に歳入の使い道に対する中央政府の管理が強化されたことが浮き彫りにされている。さらに、フーシー派支配地域では、全行政レベルの公務員に対する定期的な給与支払いが2016年に打ち切られたが、これに加え投資やサービスの予算減少なども起きたため、結果的に地方自治の空洞化が発生しており、地方政府のプロジェクトは頓挫したとされる。

第4部「地域に対する影響」では、フーシー派の地域に対する影響が論究される。

第12章では、非対称的で伝統的な紛争の事例であるサウディアラビア主導の連合軍によるイエメン介入におけるフーシー派の抗堪手法について分析されている。ここでは、連合軍とフーシー派との戦闘で用いられる人工知能などについての実態が精査されている。著者は、人的・地理的条件がフーシー派に有利であったことを認めた上で、同派が主に冷戦時代の装備、あるいは制裁下のイランからの限定的な支援により連合軍との戦闘を繰り返していると評価する。また、フーシー派の祖国防衛に対する強固さと防衛システムの回避可能な兵器の保有が紛争により示された。フーシー派による自らの優位性のさらなる活用の有無や、イランとの関係の永続性は不明だが、著者は同派が自ら、また連合軍の抑止力を再確認したと述べている。

第13章では、サウディアラビア・イエメン国境の「安全保障化(securitization)」に2004年以降のフーシー派による戦争が与えた影響が調査される。まず、冒頭で公式な協定あるいは非公式な提携に着目して両国国境の歴史的軌跡が論じられる。その上で、著者は2004年以降のサアダ戦争(Nizā' Sa'da)が、安全保障のハイブリッド化を国境に関わる主体が共通の安全保障目標に向けて協力する「統合型」から他と分離して協調性のない目標を追求する「疎外型」へと変化させる契機になったと述べる。著者は、イエメン・サウディアラビア国境におけるセキュリティ・ガバナンスの発展として四段階を挙げるが、2000年代の政治的・軍事的主体としてのフーシー派の台頭は両国政府の国境政策に変化をもたらした。国境におけるセキュリティ・ガバナンスは、両国の各主体が取り組むべき最も喫緊の課題となっている。

第14章では、外交関係の構築を通じて地域における役割を担おうとするフーシー派の野望と、それがイラン・サウディアラビア間の対立によりどのような影響を受けるのかについて論じられている。著者は、フーシー派には確固たる外交政策が存在することを強調する。すなわち、フーシー派は自らをサウディアラビアなどによる「侵略戦争」に対するイエメンの守護者として、ハーディー政権に代わる正式なイエメン国家の代表として位置づけようとしてきた。一方で、イランとサウディアラビアの域内対立は、フーシー派とイランの関係を強化し、また、イエメン内戦の「地域化(regionalization)」は、フーシー派の域内での地位向上につながったとされる。フーシー派の外交政策の基本方針は、自国への侵略に対する闘争への支持獲得であり、そのためにヒズブッラーなどとの関係を活性化させてきた実態が描かれている。

本書の最大の意義は、やはり様々なテーマ・視点からフーシー派を共時的かつ体系的に論じていることと言えよう。編者は、上記の通り、多くの学術論文やイエメンに関する本がフーシー派に関する様々な側面を論じてきたと述べる。確かに、[Salmoni et. al 2010]や[Brandt 2017]など、体系的にフーシー派について論じた研究は存在するが、中東地域におけるその存在感に比して、その数は依然として少ない状況が続いている。そのようななかで、本書では、これまでの研究では必ずしも十分に論じられてこなかったフーシー派の思想・信仰体系(第1部)や、国家の再構成をめぐる政策(第2部)などがまとめられている。これだけでも十分に画期的な成果とも言えるが、さらには、上記の対内的なテーマに加え、地域に対する影響としてサウディアラビアとの関係や、イランや「イランの民兵」とも呼ばれるヒズブッラーなどとの関係といったフーシー派の国外アクターとの関係についても触れられている点は高く評価できるだろう。また、フーシー

派に関する一次資料を豊富に駆使して各章が論じられていることも、本書の優れた点として指摘できる。具体的には、第1章などで用いられる『マラーズィム』や第8章で用いられる「ザームル」などが取り上げられていることである。長年紛争が続いているイエメンでは、学術研究のための情報の入手が困難である。もちろん、全ての情報が完全に信頼できるものであるとは限らない。しかしながら、これだけ多くの一次資料が用いられていることは、フーシー派に関する研究が依然として可能であることを示している。

多角的な視点からフーシー派に関わる多くのテーマを考察していることの裏返しではあるが、多くのテーマを扱っているために断片的な考察・分析も多くみられる。そのため、個々のテーマに関してはより詳細な研究が必要と考えられる。また、フーシー派からの視点を中心に位置づけられているため、米国はじめ域外諸国も含めて、国内外の他アクターによる同派への見方についてはあまり顧みられていない。今日、イエメン内政あるいは中東・国際政治でその地位を確立しつつあるフーシー派であるが、同派の現在に至るまでの歴史的推移や今日の動向に対して、イランやサウディアラビア以外も含め、国内外の他アクターが影響を与えていることは否めないと考えられる。そのような視点に触れられていれば、国内外におけるフーシー派の立ち位置がより鮮明になるものと思われる。

今次ハマース／イスラエルの大規模な武力衝突に関連した動きをめぐり、国際社会にその名を馳せたフーシー派だが、本書は2022年に刊行されており、それ以前から同派に着目した優れた書物である。今後もイエメン政治ひいては中東・国際政治において、ますます重要な存在となりうるフーシー派を体系的に理解する上で、本書は必読である。

参考文献

- 森本一夫 2002 「サイド」大塚和夫他(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店, p.386.
- Brandt, Marieke. 2017. *Tribes and Politics in Yemen: A History of the Houthi Conflict*. New York: Oxford University Press.
- Salmoni, Barak A., Bryce Loidolt and Madeleine Wells. 2010. *Regime and Periphery in Northern Yemen: The Huthi Phenomenon*. Santa Monica: RAND Corporation.

(井上 堅斗 立命館大学大学院国際関係研究科)